

会津大学短期大学部 非常勤講師
元福島県立葵高等学校校長
荒井 光廣

今学校は、子供たちのコミュニケーション能力の育成に重点的に取り組んでいます。

最近最もよく売れている本は、人に好かれるためのテクニック本だそうです。人に好かれることは、誰しもが願うことです。そのような本の結論を要約すると、「相手の言葉に耳を傾け、相手の気持ちを押し量り、自らの言葉を選び発すること」と書いてあります。そのとおりだと思います。またそうすることが、社会人として必要な姿勢なのだと思います。しかしだからといって、そのようなテクニック本がよく売れていることには、違和感を覚えます。なぜなら、そこには「こころ」が見えないからです。

今学校は子供たちのコミュニケーション能力の育成に重点的に取り組み、その基礎となる言語能力、表現力の育成に取り組んでいます。情報化、グローバル化、知識基盤社会化が急速に進むこの時代を生きる子どもたちにとって、言葉の重要性は益々高まっています。朝起きてテレビのスイッチを入れる。インターネットで情報を検索する。日々接する言葉の量は、飛躍的に増加しています。このような中で学校は一語一語を慎重に選び「こころ」を込めて発するという、コミュニケーションで最も大切な姿勢を子供たちに伝えることを忘れがちです。残念ながら、未だにいじめによる自殺が絶えません。相手の気持ちに寄り添い、相手のこころに自分のこころを同化させるという感情、つまり喜怒哀楽の「哀」「哀れむ」という感情が希薄になってきているように感じます。「哀れむ」とは、ともにこの社会で生きる同胞をいたわり思いやる感情であり、決して相手を蔑む感情ではありません。「哀れむ」という感情は、一語一語にこころを込めて、丁寧に発する姿勢の中で培われます。言葉は時として棘を持ち、他者をそして自分自身をも傷つけます。しかしその一方で言葉は、人のこころを励まし、温めることもできます。人は人とのつながりの中でしか生きることはできません。人とつながるとはこころを通わせることです。こころを通わせることができるから、そこに共感が生まれ互いの信頼が生まれ、コミュニケーションが成立するのです。

教師が子どもにかける一言が、時にその子どもの人生を左右します。

教師を目指す学生の皆さんに是非読んでいただきたい本があります。絶版となってしまった「遺愛集」という短歌集です。やっと図書館を通して手に入れることができました。今から50年ほど前、悲惨な生い立ちの青年が空腹に絶えきれず強盗殺人を犯し、死刑の判決を受けました。彼は中学の頃、美術の先生にほめられた言葉が忘れられず、獄中からその先生に手紙を出しました。「私は先生に教えていただいた生徒です。人をあやめて死刑囚となり拘置所にいます。自分は人にほめられたことが全然なかったけれど、一度だけ図画の授業の時に先生が、『絵は下手だが構図がいい』とほめて下さいました。それを思い出し、先生の絵がぜひ見たくなりました」。そんな彼に先生の奥さんが、絵に短歌を添えて返事を書きました。それを契機に彼は短歌を学び、やがて彼の作品がマスコミにも取り上げられ、後に歌集「遺愛集」として出版されました。そんな彼の処刑前夜の歌です。

「この澄めるころ在るとは知らず来て 刑死の明日に迫る夜温し」

この歌に添えられた彼の言葉です。「人として極めて愚かな一生が、明日の朝にはお詫びとして終わります。本来ならばもの哀しいはずなのに、夜気が温いと感じる心を得ることができました。それだけは嬉しいと感じます。刑が確定して、五年間生かされて得た命に感謝し、明日に迫った処刑をお受けしたい気持ちです。生かされて得た心でしみじみ思うことは、人の暖かさを素直に感じるができるようになって知った、人の命の尊さです」。もちろん彼の犯した罪が、悲惨な生い立ちを理由に許されるものではありません。しかしこの歌を読むとき、彼がもっと早く心優しい言葉をかけてくれる人と出会い、美しい言葉と出会っていたならばと、思わずにはられません。教師が子どもにかけると一言が、その子どもの人生を左右する言葉となることがあります。

今子どもたちの自尊心の低下が指摘されています。

価値観が多様化し、知識基盤社会化する時代変化の中で、学校は知識の伝達のみを追われ、子どもたちは「学ぶことの意義」を見出せず、「生きる意味」を見出せず、自己の有用感が持てないでいるように感じます。

このような中、この度の大地震で、我が家とともに津波の濁流に飲み込まれながらも、奇跡的に一命を取り留めた被災地相馬の高校生の作文が忘れられません。「たくさんの人にお世話になりました。奇跡的に助かったこの命を大切に、精一杯勉強して、今を精一杯生きて、いつかこの恩を返せる生き方をしたいと思います」。人は誰しも、悲しみや苦しみのない、喜びに満ちた人生を望みます。しかしそんな人生などあろうはずがありません。むしろ悲しみや苦しみの数の方が、喜びの数を上回っているように思います。そうであるならば生きるということは、悲しみや苦しみにどう向き合うのかということであり、さらに人生とは、その悲しみや苦しみにどう向き合ったのかという、自らの物語を紡ぐことだと思えます。人は耐え難い悲しみや苦しみに出会くと、その現実から、また時には人生そのものから逃避してしまう選択をする人と、逆にそれに向き合うことをとおして、内面を成熟させ、人生を豊かなものにしようという選択をする人に分かれるように思います。

ユダヤ人強制収容所に収監されたにもかかわらず、奇跡的に生き延びた精神科医ヴィクトール・フランクルは、その著書の中で「人間の自由とは、諸条件からの自由ではなく、それら諸条件に対して自分のあり方を決める自由のことだ」と述べています。またインド移民で厳格なシーク教徒の両親を持ち、高校のときに網膜の病気で視力を失いながらもコロンビア大学教授となった女性研究者シーナ・アイエンガーは、「選択」を自らの研究テーマとして選び、次のような言葉を残しています。「私たちは日々人生の選択をする。選択は人生を切り開く力になる。そしてその選択自身が私たちを形作っていく」。どんなに困難な状況にあっても自ら人生を選択する勇気を持つことで、「生きる意味」を見出し、主体的に生きようとする力が自然に沸き上がってくる。彼女はそう言いたいのだと思えます。

教育とは、この社会の中で他者とともにより良く生きる力を培うことです。

先の高校生は、大地震という如何ともし難い不条理を受け入れながらも、自分の存在は自分の力だけによっているのではなく、多くの他に依存し支えられていることに気付きました。そして自分もまたこの社会の中で掛け替えのない存在であることに気付いたとき、「生きる意味」を見出し、自らの人生を選択することができました。つまり「生きる意味」は自分の力によ

で見出せるものではなく、他者からもたらされるものなのです。従ってその根底にある自尊心は、独りよがりでは他者への敬意の念を忘れた高慢な感情であってはならず、他者とともにより良く生きることを促す感情でなければならないのです。それは教育が育まなければならない最も大切な感情であり、その育成こそが喫緊の教育課題なのです。

教育とは、この社会の中で他者とともにより良く生きる力を培うことです。そのためにあなたは教師として子どもたちに何を伝え、子どもたちのどんな成長を願いますか。

*** 本学は現在（平成 27 年 8 月）文部科学省に新学科（幼児教育学科）の設置ならびに教職課程設置の認可申請中であるが、教職課程の設置が認可された場合を想定して執筆した。**